10月27日　五加保育園

広報 ひがししらかわ

1992
平成4年
11
No 379

●発行／東白川村
●編集／企画財政課
岐阜県加茂郡東白川村神土
〒509-13　☎05747(8)3111
●印刷／下呂印刷株式会社

人口の動き

—10月末住民登録人口から—

世帯数	911世帯
人口	3,447人
転入	2人
転出	7人
出生	2人
死亡	1人

先月と比較して4人減
昨年の同月と比較して
26人減

芋畑の秋！笑顔も大豊作

〝収穫の秋〟。秋といえば芋。保育園恒例の秋の芋掘りに園児たちが一斉に畑に繰り出しました。

蔓を引っ張ったり、手で土を掘りおこしたりと大奮闘にもかかわらずなかなか顔を見せてくれないさつまいも。

それだけに楽しみも大きいというもの。

子どもたちの喚声が秋空に鳴り響いていました。

10月27日　神土保育園

11月2日　越原保育園

東白川小学校が平成四年度全日本健康推進学校表彰（朝日新聞社主催、文部省、厚生省後援）の中規模校（七学級以上十七学級以下）の部で全国優秀校の「すこやか賞」に選ばれました。

この賞は、全国で十一校だけの栄誉。しかも中規模校としては全国で四校だけとまさに快挙です。

保健・衛生・体育・環境と全ての総合賞といっても過言ではないこの賞の受賞について中山健彦校長先生は「今までの積み重ねが評価された」と先輩の先生、児童、PTAの努力を強調されました。

伝統的な健康づくり

今回小学校が受賞した健康推進学校という賞は、一昨年までは、健康優良学校という名称でした。昭和三十四年に旧神土小学校が日本一になったのは、この賞をいただいたわけです。

昨年からは、名称が変わっただけでなく、その評価もいわゆる健康な学校を対象にしていたものが、学校や地域での取り組みが重要視されるようになったのです。

下の年表をご覧下さい。昭和五十五年の開校以来、健康優良学校、および歯の優良学校は、毎年県レベルの表彰を受けています。今年は、この二部門で県一位にさらに学校環境衛生活動でも初めて県一位となり、名実ともに県下四百十六校の頂点を極めたのです。

「田舎の子はほうっておいても健康だ」という考え方は、現代では通じません。食生活を含めた日常生活は、都会に住む子となんら変わりはないからです。にもかかわらず、毎年高い評価が得られる一つの理由は、子どもたち自身の意志はいうまでもありませんが、学校、PTA、さらには、子どもたちを取り巻く地域全体が、〝健康づくり〟に関して高い関心を持ち、深い理解と協力があったからなのです。

小学校健康年表

〈昭和五十五年度〉
・健康優良学校　優良校（岐阜県教育委員会）

〈昭和五十六年度〉
・健康優良学校　準県一位
・歯の優良学校　準県一位（岐阜県歯科医師会）

〈昭和五十七年度〉
・健康優良学校　準県一位
・歯の優良学校　準県一位

〈昭和五十八年度〉
・健康優良学校　準県一位
・歯の優良学校　準県一位

〈昭和五十九年度〉
・健康優良学校　県一位
・歯の優良学校　県一位
・全国健康優良学校　（朝日新聞社）

〈昭和六十年度〉
・健康優良学校　県一位
・歯の優良学校　県一位
・全国健康優良学校

〈昭和六十一年度〉
・健康優良学校　県一位
・歯の優良学校　準県一位
・全国健康優良学校
・全国歯の優良学校　（日本歯科医師会）

〈昭和六十二年度〉

この取り組みが自慢です

小学校の西側には「遊びの森」があり、約一・三㌶にわたって「ブロムナード東白川小」が延びています。

「森も教室の一つ」これは中山校長先生のことばですが、子どもたちはここでおいしい空気を吸って自然とふれあい、大声を出し駆けまわります。

遊びの森には現在大小あわせて約三十種のアスレチック器具があります。これは卒業生やPTAの協力で設置されたものです。遊びの森には急坂がありますが、高学年の子どもが低学年の子どもを思いやるといった豊かな心も育てています。

また、ユニークな取り組みとして紹介したいのは〝欠席〇運動〟です。昭和六十三年度一日平均の欠席者数は九・八人。昨年は一・八人。

この運動を始めて四年、成果は数字のとおりですが、それ以上に子どもたちの〝学校へ行きたい〟という気持ちがそうさせるのではないでしょうか。

取り組みについて一部簡単に紹介しましたが、こうしたことも含め、今まで受け継がれてきた健康づくりの積み重ねが今年、「すこやか賞」という大輪の花を咲かせました。

しかし、これはまだ、ゴールというわけではありません。今まで培ってきた、小学校の校風とも呼ぶべき一貫した健康づくりを継続することが、本当に価値のあることではないでしょうか。いったん積み上げたものを崩すことは簡単ですが、それを維持し、さらに一段積み上げることに意味があるのですから。

が、転んで擦りむいても、鼻血を出しても泣く子は一人もいません。それどころか、少々けがをしてもすぐに駆け出しています。

体力づくりの面からいえば忘れてならないのは全校登山です。今年七年目を迎えて一巡したわけですが、今までに捨薙手掛岩、寒陽気、尾城、新巣、無反山と九百㍍級の六山を制覇しました。

こうした登山や遊びの森での活動は、体力面はもちろんですが、高学年の子どもが低学年の子どもを思いやるといった豊かな心も育てています。

収穫祭で

さらなる躍進をめざして

学校で行われている興味ある

健康への関心が高い村

大澤先生

「こうした高い評価を受けられたのは、子どもたちはもちろん、PTAのみなさんや諸先生方の努力の結果でしょう」と東白川病院長大澤耕太郎先生。

「この村の人は、検診などの高受診率が示すように健康に対して非常に関心が高い。また、学校では健康と密接な関係を持つ歯科部門に早い時期から力を注いでこられた。この積み重ねが大きく評価されたのではないでしょうか」というのが院長先生の診断です。

今後の課題は正しい歯ならび

昭和三十年代から校医として小学生の歯を見てこられた熊崎道一天祐館歯科医院長は、次のようなお話を聞かせて下さいました。「以前と比べると虫歯を持つ子がほとんどいなくなりました。これは、県内のどの学校と比較しても引けをとりません。給食後の歯みがきなど徹底して行われた成果であると思います。しかしその反面、歯ならびの悪い子が非常に増えています。もの

熊崎先生

のをよくかむことは、健康の基本です。最近は軟いものばかりであごの骨が未発達となるのが原因です。歯ならびが悪いと姿勢が悪くなり健康をも損ねます。今後は硬いものを食べる習慣をつけることも大切になってくるでしょう」

・健康優良学校　県一位
・歯の優良学校　準県一位
・全国健康優良学校

〈昭和六十三年度〉
・健康優良学校　準県一位
・歯の優良学校　準県一位
・学校環境衛生活動　県奨励賞（岐阜県学校保健会）

〈平成元年度〉
・健康優良学校　準県一位
・歯の優良学校　準県一位
・学校環境衛生活動　県努力校

〈平成二年度〉
・健康優良学校　準県一位
・歯の優良学校　県一位
・学校環境衛生活動　県努力校

〈平成三年度〉
・健康推進学校　県一位
・歯の優良学校　県一位
・全日本よい歯の学校（全日本学校歯科医会）
・学校環境衛生活動　県努力校
・岐阜県代表健康推進学校（朝日新聞社）
・岐阜県優秀校（岐阜新聞社）

〈平成四年度〉
・学校環境衛生活動県一位　優良校
・健康推進学校　県一位
・全日本健康推進優秀校　すこやか賞（朝日新聞社）
・歯の優良学校　県一位

ってみよう、閉じたアルバム

安江宏子さんの里帰りを機に

東白川村でただ一人の中国残留孤児となった安江宏子さんが十七年ぶりに里帰りをしました。

十七年ぶりというのは昭和五十年に最初の里帰りをして以来のことだからです。

今回はご主人の季鴻賓さん（七一歳）孫の季永利さん（十八歳）を伴っての帰国です。

十月七日、北京の日本大使館職員二名に伴われて成田空港へ着き、同日夜越原の村営住宅中根荘に落着いた三人は、十二月中旬に日本を離れるまでの二か月間、宏子さんは懐かしいふるさとの秋を、鴻賓さんと永利さんははじめての日本の暮しを満喫することでしょう。

成田から東京へ向う電車の中でご主人が漏らした感想は、「日本はピカピカ光った自動車ばかり、中国の自動車はうす汚れている」。

孫の永利さんは「中国では子供たちはバスの後の席に好んで乗ります。道が悪いので飛び跳ねるのが面白いからですが、日本では前も後も同じですね」という感想。なるほど……。

東京駅で、これから新幹線に乗る……と告げられて、鴻賓さんも永利さんも宏子さんの通訳なしで「シンカンセン！」とすぐ理解できたようで、日本の「新幹線」は中国でもそのまま通用する国際語であることを実証しました。

まだ忘れてしまうには少し早い

なぜ中国残留孤児と言われるのか、今ではそのことも閉じられてめったに開いて見ることのないアルバムのように遠い歴史となっていますが、宏子さんの里帰りの機会にもう一度そのアルバムを開いて新しい空気をあててみれば、今まで気付かなかった事が見えてくるような気がします。

満州開拓団小史

▼昭和十六年
太平洋戦争はじまる。

▼昭和十七年
満洲開拓、東白川村分村計画の構想進む。

▼昭和十八年先遣隊出発。

▼昭和十九年第一次本隊出発、東柳毛溝で開拓はじまる。

「我が東白川村開拓団の入植地は北満でもずっと北の方で、黒河省一つ隔てて、ソ連領、国境まで四十里、（百六十キロ）と言います」

＝当時の手紙より。

▼昭和二十年
日本、戦争に敗れる。開拓団敵地の中で越冬。

▼昭和二十一年
九月初旬、東柳毛溝を出発し帰国の途につくも、死亡、残留などの犠牲の末、十月二十五日百七十一名の第一次引揚者帰村。

▼昭和二十四年
鶴岡炭坑への残留者帰国はじまる。

▼昭和三十五年
安江宏子さん死亡宣告

▼昭和四十六年
安江宏子さん生存確認

▼昭和五十年
安江宏子さん里帰り

▼昭和六十三年
村長以下二十三名の訪中慰霊団、中国を訪問、東柳毛溝を訪れ犠牲者を慰霊する。

▼平成四年
天皇中国を訪問、多大な苦難を与えた……とお言葉。
宏子さん二回目の里帰り。

どこまでも続く平原、東柳毛溝

開拓団のくらし

再び め

残留孤児を生んだ五十年前の歴史

歓迎会でのご主人のあいさつ

宏子さんは昭和十八年、家族と共に満洲国（現在の中国東北地区）へ渡りました。

当時は日本が世界を相手にして太平洋戦争に突入（昭和十六年）した直後で、中国を侵略し満洲国という国を作っていました。

その満洲国の広大な平原を拓いて食糧を生産するために、日本の農村から「開拓団」が派遣されたのです。

東白川村から開拓団として中国へ渡った人は三百五十名に達し、宏子さんもその一人でありました。

昭和二十年八月、日本の敗戦で敵地に残された開拓団はかずかずの犠牲を払いながら帰国しましたが、その時中国に取り残されたのが「残留孤児」です。

日本全国に数多くの残留孤児がある中で、東白川村でただ一人の孤児となったのが宏子さんでした。

ハルピンの難民収容所で父母を病気で失った当時十六歳の宏子さんは、その後当時二十四歳の李鴻賓さんと結婚しました。

敬虔なイスラム教徒である鴻賓さんとの間に四男二女をもうけ、現在は黒龍江省湯原県鶴立に住んでいます。

中国ではかつて、土地は国のもの、生産物も全部国家のものとなっていたため、農民の生産意欲が低く、国民の食料にもことと欠くようなありさまでした。

今では一定の量を国を納めればそれ以上は自由に市場で売ることができるので増産への意欲が向上し、一万元の生産収入を上げる農家「万元戸」もたくさんできたということです。

一人しか子供を作ってはいけない中国。四男の嫁さんが何かの席で女の子が欲しいワ……と言ったら翌日の朝、玄関先に女の赤ちゃんが捨ててあった。

拾って育てたその子はもう四歳とのことです。

中国では春になるとわらびをとって塩漬けにしたものが売れるので、みんなせっせとわらび採りをする、何でも外国へ売れるそうだという宏子さん。その「外国」が日本なんですヨ……。

友人と写真をみながら歓談

中国の土になる覚悟の最後の里帰りか……

十七年前、はじめての里帰りのとき宏子さんについて来た「雪ちゃん」。その愛くるしい笑顔を覚えておいでの人も多いでしょう。

お下げ髪の十三歳（当時）の少女も、今では三十歳。もちろん一児の母、佳木斯の銀行に勤めているとかで現在の中国では恵まれた生活のようす。

少し前にはホンコンへ行って来たということです。

そんな話をする宏子さんの顔には、十七年前にくらべて明るいものがあるように感じられます。

わらびの塩漬を買う日本は外国であっても、宏子さんにとって日本は自分の国です。その証拠に宏子さんのパスポートは日本国発行の日本国旅券です。

日本へは帰国であって入国ではありません。

しかし十二月には中国へ帰ります。

「私を育ててくれた養父母はもうこの世に居ないけど、その恩に報いるために、そして夫や六人の子供、十一人の孫のためにも、私は中国に骨を埋めます」そう語る気持ちの落ち着きが明るさのもとでしょうか。

中国の料理の味付けは塩が基本とか。「日本の料理は甘い」という三人。その甘さが、せめて今までの、苦労多き人生の慰めとなってほしいものです。

村営住宅でくつろぐ宏子さん一家

昭和50年の里帰り：雪ちゃんと

ィー・タイランド

タイ農業事情調査団研修レポート

今日は、お早う、さようなら…タイ語のあいさつはどんな場合も〝スワッディー〟です。
東白川農業委員会では初めての試みとして、九月二十四日から三日間、FEC国際親善協会とAJSアジア国際交流機構の企画したタイ農業事情調査等研修団としてタイ国を訪問、無事帰国しました。

☆研修団参加者（十九名）
団長―斎藤哲夫氏（名古屋大学名誉教授、タイ国カセサート大学客員教授・海外農林業事情調査委員長）
副団長―桂川眞郷村長・団員―農業委員十四名・事務局―農務課二名・添乗員―一名

第一の驚きは日本車の多いこと

九月二十四日午前九時、名古屋空港待合室にて、団長斎藤哲夫先生、添乗員宮川宏二さんと合流、結団式を行ったのち、出発したのが十時三十分、タイの首都バンコク入りしたのが午後二時三十分、時差が二時間あるので、空路五時間五十分で到着。

バンコクの天候は、晴れ。九月下旬とはいえ、日本の梅雨時と八月の酷暑が一緒になったような暑さを感じる。

空港からホテルまで通常車で四十分くらいのところをこの時は渋滞にかかり二時間かかった。タイではスクールバス制度がなく、通学が遠距離であるため、生徒数の半数は送迎の自家用車となり、三時過ぎになると街には車があふれ渋滞になるとのこと。驚いたことは、走っている車がほとんど日本車だったことです。聞くところによると車の約九十パーセント、単車の九十五パーセントが日本製とのこと。トラックなどの後部には日本の社名を大きく書いたものが目立ちました。

ホテルで体験 日本との違い

今回、宿泊したホテルは、三泊とも同じ所で、まだ建設中でしたが、設備などすばらしいところで二名の日本人従業員もおり、言葉に関して不自由はありませんでした。こうした優良ホテルであっても、水道水は、飲むことはできず、飲み水は、もっぱら村から持参した白川茶の缶茶や備え付けの飲料水を利用。しかし、入浴用の水だけは濁りのある水道水を使用せざるをえず、日本との大きな違いを見た気がしました。

また今回の研修では、朝食以外は全てホテル外で外食。タイ米はパサパサしていたがおいしく食べられた。

カセサート大学での講義

カセサート大学長の講義を聴講

研修の第二日目は、午前中にこの研修の目的の一つでもあるカセサート大学を訪問し、学長アデュラヴィダヤ博士の講義を受けました。

テーマは「タイにおける米の生産事情」。学長が英語で講義し、斎藤団長が通訳するといった形式で進められましたが、予定時間よりも三十分も延長されるなどその熱の入れ方がこちらにもひしひしと伝わってきました。

米の輸出量が世界一を誇るタイ経済の主力は、農業力であり、人口の約七割が農業従事者であるとのこと。

また、近年工業の進展もめざましく、日本をはじめ多くの国々が農地に工場を建設、技術と雇用の促進は、タイ経済に大きな貢献をしています。

タイと日本の共通点は〝ともに米を主食とする民族〟ということです。このため日本の稲作に関わる伝統的な行事にはタイと共通するものが多く、日本の稲作が東南アジアや中国から伝播したことが理解できました。

現在タイでは、農業の多角化と工業開発のバランスをとりながらNIES（新興工業経済地域）五番目に仲間入りをするまでに著しい発展を遂げています。

水に面した高床式住宅はタイの一つの〝顔〟

スワッテ

水田の中を舟で移動する農民

研修三日目、この日から青年協力隊員としてタイに派遣されている大明神出身の田口悦代さんも通訳を兼ね同行してくれました。

この日は早朝から水上マーケットを視察。タイは「東洋のベニス」の異名を持つほど運河の多い国で、人口の五分の一が水に面した高床式の家に住んでおり、水上タクシーも走っています。

この日は、水上マーケットを視察した後、近くの水田、ラン農園、精米工場も視察。特に水田農業の視察は、日本の稲作とのあまりの違いから最も驚かされたものの一つです。

三輪タクシー

視察した農家は、ちょうど今が収穫期で広々とした水田には稲穂が実っていましたが稲はほとんど分けつしておらず、一穂に八十から百粒ついているような状態。米の長さも細長く日本の米と比べると倍くらいありました。タイのこの時期は、雨期。毎晩のように激しいスコールがあり、稲は常に水の中にあるとのこと。このため水田の中を舟で移動する農民の姿も見られました。作付も二期作もしくは二期半作がほとんど。見学した農家では、収穫が終わったので十日もしたら直まきを行うとか。

気候風土の違いを改めて感じた視察でした。

また、この日の夕食は、タイ矢崎部品取締役の平松和夫氏からお招きを受けました。平松氏は昭和六十年岐阜部品創立の際ご尽力いただいた方で、私たち一行にとっては思い出に残る一夜となりました。

厳しい戒律が生んだ生活習慣

最終日は、日本人町跡のあるアユタヤの遺跡を見学しました。十七世紀前半朱印船に携わった山田長政ら日本人二千人がこの地に住み日本人町を形成していたといわれている所。現在は、石碑と山田長政の墓らしきものがあるだけで当時の面影は、残念ながらありませんでした。

今回の研修を通して強く印象に残ったことは、タイという国が、筋金入りの仏教国であることです。この国では、男子は、一生のうち三か月以上は仏門に入って修業しなければなりません。自分たちは水辺の高床式の家屋に住んでいるのに対し、仏教寺院はどこもきらびやかな神々しい建物ばかり。しかも日常生活も厳しい戒律によって定められています。

「タイの観光は寺院めぐりに始まる」といわれていますが、今回見学をした寺院や王宮も、作られた当時の仏教建築の技術を結集したすばらしい建物ばかりでした。こうした点からもタイ人の仏教に対する信仰心の深さを伺うことができました。

わずか三日間という短期間のタイ滞在でしたが、視察中事故などのアクシデントにもあわず天候にも恵まれ、また斎藤団長をはじめとしてタイ事情に精通しているたくさんの協力者があって、タイの農業事情ばかりでなく、生活習慣といったような側面までもタイ事情を知ることができ予想以上に得ることの多い研修となりました。

壮麗な王宮前にて

青年協力隊　田口さんも現地で同行

広報四月号でも紹介をした大明神出身の青年海外協力隊員田口悦代さんが、二十六日二十七日の二日間、研修団の一行に同行しました。

今年五月から二年間の契約でタイに渡っている田口さんは現在、バンコク市内から四百五十キロ離れたコンケン市で大学病院に勤務しています。

一行にとっては田口さんの来訪は心強い同行者でした。

タイで頑張る田口さん(左)

秋 話題がいっぱい

プレカット工場で説明を受ける香良洲町のみなさん

〝秋〟、文化の秋、スポーツの秋、読書の秋、旅行の秋、そして食欲の秋…。暑い夏が終わりを告げるこの時期は、気候的にもしのぎやすく、いろいろな行事も行われる季節です。
みなさんはどんな秋を過ごしましたか？この秋の行事をいくつか追ってみました。

香良洲町からのお客様

十月七日、三重県香良洲の老人クラブのみなさん十六人が来村され、村の老人クラブのみなさんとの交流を行いました。

平成元年に香良洲町との間に交流協定を結んでから四年、両町村のクラブ間では、行ったり来たりの交流が続き、香良洲町のお年寄りが来村するのは、平成二年に続き二度め。

午後到着した一行は、村のクラブの代表の皆さん二十名に出迎えられ、ふるさとセンターで〝ミニガヤガヤ会議〟。「来るたびに立派な施設が作られていることには驚きです」「自然が美しく空気がおいしいから養生しに来たい」「白川の石をもらって香良洲町の海岸に白川庭園を作り、子々孫々まで残していってはどうか」といったような建設的な意見や感想が出るなど大いに盛り上がった会となりました。

またこの日は、懇談会の後村内巡りも行われ、「せせらぎ荘」を皮切りに、「プレカット工場」、「味の館」を見学。どの施設も初めて見る人ばかりということもあっていろいろな質問も出ていたようです。

村内視察を終えた両町村の一行は、下呂温泉にて懇親会を行い、交流を深めました。

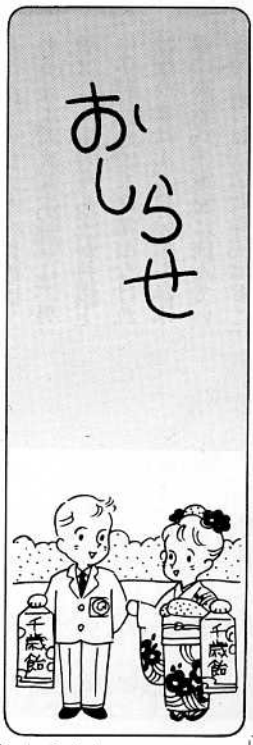
120年振りの里帰り？

十一月一日から三日間、村民センターでは、恒例の文化展が開かれました。

今年の文化展には、例年通り小中学校の児童生徒の作品展や文化協会の生け花、手芸、書、俳句、短歌、狂俳などに加え、廃仏毀釈に関する特別展が文化財審議会の協力で行われました。

この特別展で注目を浴びたのは、下呂町から百二十年ぶりに里帰りをした仏像二体です。

おしらせ



無事故で楽しい狩猟を！

十一月十五日からは、いよいよハンター待望の狩猟シーズンが始まります。しかしこの期間中心配なことは、毎年のように発生している鉄砲、火薬に関する事件事故です。昨年の狩猟期間中の事故は、全国で三十三件発生し、三十四人のかたが死亡されたり、けがをしています。

県内での発生状況としては、幸い事故は発生していませんが、猟銃の紛失事件が四件発生し、この内二件は猟場で発生しています。

銃砲・火薬の紛失や盗難被害は「テロ」・「ゲリラ」に使用されたり強盗事件などの凶悪な事件に利用されることが予想されますので、銃砲所持者のかたは次のことに注意しましょう。

①銃砲や弾の保管・管理を徹底する。
②暴発の防止をする。
③前方の安全を必ず確認する。

青色決算及び年末調整説明会の開催

個人白色申告者及び法人を対象とした年末調整説明会と個人の青色申告者を対象とした青色決算及び年末調整に関する説明会を次の日程で行います。

対象となるかたは、ぜひご出席下さい。

【年末調整説明会】
●日時／十一月二十六日(木)午後一時三十分～三時三十分
●場所／白川町町民会館
●問い合わせ先／関税務署法人課税第一部門（源泉担当）☎〇五七五（二二）二二三三内線40

【青色決算及び年末調整に関する説明会】
●日時／十二月二日(水)午後一時三十分～三時三十分
●場所／東白川村民センター
●問い合わせ先／関税務署個人

明治初年、新政府の発令した神仏分離令の余波は、当時平田国学の隆盛極めた苗木藩下にあった私たちの村では、廃仏毀釈という大波となって押しよせ、村にあったお寺はもとより、仏像、仏具全てに至るまで、あるいは焼き払い、あるいは川に流すなどして処分することを余儀なくされました。

今回、百二十年ぶりに里帰りをした仏像は、越原日向にあったとされる薬師堂に祀られていた十二神将像のうちの二体、伐折羅神（丑神）、波夷羅神（未神）です。この二体は、下呂町にお住まいの中島定寿さんが土蔵に保管していたものを今回文化展の三日間特別に拝借したもの。この二体を借りるにあたっては、東白川村史研究会のみなさんが、昨年冬から調査を行い、その報告書によれば、中島さんのお祖父さんが越原に生糸を購入に行った折、ある家で「持っていって欲しい」と頼まれたものだそうです。また、この二体のほか村内で個人所有されていた貴重な仏像や仏画も展示。

廃仏毀釈の歴史を物語る品々を一目見るため、三日間で約七百人の人が訪れました。

波夷羅大将（未神）　伐折羅大将（丑神）

体育の日、青空の下 五加区民運動会

今年で十回目を迎えた五加区民運動会が晴天に恵まれた十月十日、五加運動場で行われました。

久須見・宮代・大沢の各集落を紅組に柏本・下野集落を白組にと五加地区を二分して行われたこの運動会に子どもからお年寄りまで総勢三百人が参加。家族総出で〝スポーツの秋〟を楽しみました。

いつもは、仕事でいそがしいお父さんたちもこの日ばかりは、競技に、また、子どもたちの出番になるとカメラマンにと大ハッスル。

結果は、わずかの点差で紅組が勝ちました。

お年寄りとちびっこの玉入れ

三集落の親善深め ドッジボール大会

十月十日、中通農村公園では、中通・神付・加舎尾の三集落によるドッジボール大会が開かれ、家族づれなど約百三十人が参加。体育の日に心地よい汗を楽しみました。

この大会は、農村公園運営委員会（代表村雲厳美さん）が「公園をもっと利用しよう」という目的で始めたもので今回が二回目。前回はゲートボールでしたが、今回はルールも簡単なドッジボール。集落の班単位で、八チームが参加。ボールは当たっても痛くないビーチバレーのものでしたが軽いため風で吹き飛ばされるような場面も……。

約二時間の大会後の慰労会では参加者全員〝食欲の秋〟を大いに楽しみました。

「それ！逃げろ」

図書コーナー

「六千人の命のビザ」 杉原　幸子著

どんな人にも差別なく勇気を持ってビザを書かれたことにとても感動しました。自分の命や肉親の前途など随分悩まれた後に選ばれた道だろうと思うと、ただただ感激でした。

推薦人（67歳　女）

「きらきらひかる」 江国　香織著

アル中の女性と男しか好きになれない男性の結婚してからの恋愛物語です。互いの心の傷と相手に対する愛情が交錯しつつ、自分達の家庭を作っていく姿がひたむきで純粋に思えます。

推薦者（26歳　女）

課税第一部門（指導担当）☎〇五七五（二二）二二三三内線46

平成五年度有線電話が更新されます

昭和四十七年に現在使っているダイヤル式に変更した有線電話ですが、来年度本部交換機の更新にあわせ現在黒電話をお使いのご家庭では、取り替えしなければならなくなりました。

これは、現在使用している電話機の生産が中止されており、故障の際修理ができなくなったためです。新しい有線では、本部交換機が電子交換機に、各家庭の電話機もプッシュ式となり、新たな機能も加わり、幅広く利用することが可能となります。

なお、取り替えについては有料となります。

ご家族そろって ご参加を…

〝自然の恵みに乾杯！〟をテーマに、第十三回東白川村産業祭が十一月二十二日（日）、東白川中学校体育館をメイン会場として開催されます。

お茶まつり、大鍋まつり、さいとりさしなど見て、食べて、参加してと盛りだくさんのイベントにご家族そろってお出かけください。

川辺り一面竿・さお・サオ…大物釣りに281人が挑戦

秋晴れに恵まれた十月十一日、中日新聞社杯秋の清流マス釣り大会が五加柏本の神矢橋から下流約一キロの区間で行われ、遠くは名古屋市からという人も含め、村内外から三百人近く参加者が詰めかけ、さおを入れる場がないほどの大盛況となりました。

今年で七回を数えるこの大会ですが、参加者が予約の段階から百八十人を超え、当日参加も含め三百人近くになることは初めて。午前四時からの受付には長蛇の列が並ぶといった状況。

釣り開始が、午前七時からということもあり、五加センターの受付横でバザーを開いた五加スポーツクラブのご婦人の皆さんのうどん、豚じるなどは飛ぶように売れこちらも嬉しい悲鳴。

「今後は、範囲を広げるなど対策を考えたい」と事務局側も嬉しい誤算となりました。

入賞者は次のとおり（敬称略）

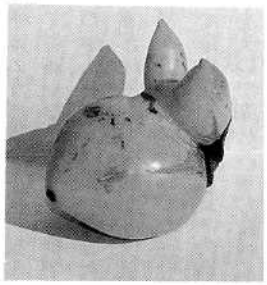
五加スポーツクラブのバザー

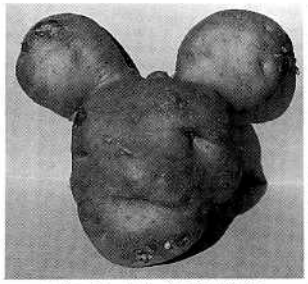
大物賞①西山幸二（恵那市）五十・二キロ②安江一夫（柏本）③長谷川忠好（付知町）▽大漁賞①森武（名古屋市）二十三匹②原等（中津川市）③安藤貴志（坂下町）▽レディース大漁賞①中川好子（羽島市）十匹②長谷川とき（付知町）③林尚子（岐阜市）▽ちびっ子大漁賞①今井健太郎（大沢）十匹②林睦娘（岐阜市）③安江あゆみ（平）

見わたす限り竿だらけ

秋あなたは何に見えますかめずらしいもの二題

〝秋は食欲〟とばかりに食べてしまうには、ちともったいないと役場に届けられた珍品野菜二点。上の写真は、今井保都さん（大沢）の採った秋の風物詩柿。見方によってうさぎにもねずみにも見える優れ物。下の写真は、安江千之さん（下親田）作。〝ミッキーマウスだ〟と大喜びだとか。はたしてお味の方は……？。


今井保都さん（大沢）作


安江千之さん（下親田）作

畑長寿の秘訣はネギ作りギネス自己記録を更新

今年度のギネスの締め切り間近の十月三十日に、また一つの記録が誕生しました。

昨年一メートル八センチという長いネギを作られた神付の今井良吉さんが今年はさらに三センチ上まわる一メートル十一センチのネギを栽培。

今井さんは、明治三十三年生まれで今年九十二歳。「来年も挑戦する」と意欲満々。期待しています。

見事、自己記録を更新した今井さん

■戸籍の窓＝敬称略

誕生おめでとうございます

（黒渕）髙井 三郎・恵里子 和貴（ながたか）（長男）

（上親田）安江 友則・浩子 直久（なおひさ）（長男）

いつまでもおしあわせに

平松 雅章（丹羽郡大口町）・伊藤みち代（柏本）

安江 智樹（陰地）・安江 文子（下親田）

川柳 勝裕（岐阜市）・安江 章江（黒渕）

金崎 隆（相模原市）・安江 眞弓（黒渕）

大島 義仁（瑞浪市）・樋口利久美（西洞）

おくやみ申しあげます

田口 義夫 81歳（平）

心

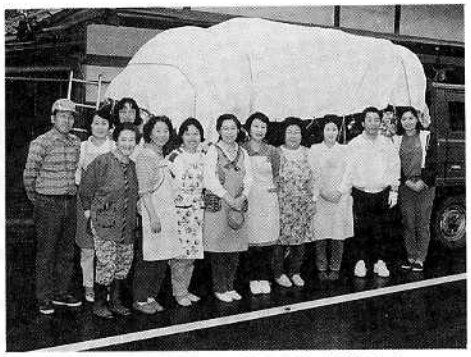
小さな缶が大きな価値に 結成一年有瑠美会

〝四百三十一・八キロ〟。これは、昨年十一月に結成された有瑠美会の一年間の成果です。

「プルトップ（アルミ缶のふた）を集め、車イスを購入しよう」という呼びかけで、平の神戸啓子さん、沢木紀代子さんらが中心となって発足した同会では、このほど集まったアルミ缶とプルトップを美濃加茂市のアルミ缶製造会社三菱マテリアルに出しました。換金された金額は、三万二千円余となり、同会会員の皆さんも「二百キロくらいあればと思っていましたが、こんなにあるなんて、さっそく車イス購入資金に充てたいです」と思わぬ結果に大喜び。

現在、会員数は約二十名ですが、これだけの量集まったのも会員以外の方からの協力があったからとのこと。中には、海外旅行に行って旅行先で集めてきたという人や、歌舞伎公演の際、里帰りした折に「広報で見ました」とプルトップを届けられた中京村人会の会員もあったようです。

車イスを購入するには五万円くらいかかるとのことですが、社会福祉協議会を通して購入すると今回換金された金額で充分購入できるとか。「今後は、これを励みに有瑠美会の輪を広げ、一台でも多く車イスを寄付したい」と神戸さんは話してくれましたが、誰でも少しの心がけで協力できる奉仕活動に皆さんも参加してはいかがでしょう。



集めた缶は2トントラック山積みに

山

額に汗！中学生41名 林業を体験

十月十七日、中学二年生四十一名を対象に「林業体験学習」が平後山の分収造林地（少年の山）で行われました。

〝子どもたちに少しでも林業を理解してもらいたい〟そんな願いから林業グループ（栗本重秋会長）が主催し今年で三回目となるこの体験、生徒を十班にわけ、林業グループの指導で実際に立木を伐倒。また、今回新しい試みに「もくもくクイズ」なるものを実施し好評でした。

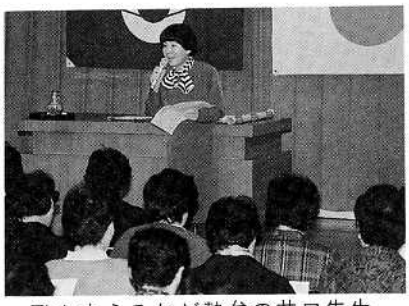
「切り口からこんなことがわかるの」

話

文化の月に初の試み 「婦人講演会」開催

〝演題は「女のひとりごと」〟十一月七日、東白川村婦人会では、瑞浪市公民館主事井口千代子先生を講師に迎えて「婦人講演会」を開催しました。

こうした婦人だけの講演会が開かれることは初の試み。「何か婦人会で行事を、という声の中、今年は村の文化講演会が無い年なので開きましたが、先生も参加者も全て婦人ということでとてもなごやかな雰囲気となり大成功でした」とは安江さき会長の話。ユーモアたっぷりの井口先生の話は、百三十四人の参加者を魅了しました。



歌を交えるなど熱弁の井口先生

■善意の寄付＝敬称略

【社会福祉施設整備指定寄付金】

現金三十万円＝栗本忠行（平）

【庁舎建設指定寄付金】

現金五十万円＝田口暁（平）

【社会福祉協議会へ】

現金五万円＝寺坂五郎（下野）

【東白川小学校へ】

産経新聞写真ニュース一年分＝安江忠昭（陰地）

【五加保育園へ】

絵本五冊＝安江建材（柏本）

絵本四冊＝古田奨（久須見）

■工事入札の結果

①は入札期日②は落札金額

（じ）および落札業者

▼白川瀬音公園整備一期工事

①十月二十三日②二千百六十三万円、㈲マルト土木

▼沢尻線改良工事

①十月二十三日②五千二百五十三万円、山田土建㈱

▼道路台帳整備委託業務

①十月二十六日②三百九万円、大洋測量設計㈱

わが家のスター

満1歳

▲安江 美季ちゃん
（広和さん・万里子さん長女＝日向）

◀有田 和津ちゃん
（尚樹さん・恵実さん二女＝下縄田）

ふれあい広場

新婚さん♡
■ワン・ショット■

田口正昭さん・江里子さん

この写真は引きのばしてお二人に進呈します。

今月ご紹介するカップルは、十一月八日結婚式を挙げられたばかり、まさに新婚ホヤホヤの田口正昭さん・江里子さんご夫妻（平）です。

今年三月、親しい人からの勧めで知り合ったというお二人、江里子さんは柏本のご出身ですが、お互いにこの時が初体面。奥さんの第一印象を「おとなしそうな人」とご主人が話せば、奥さんは、ご主人を「とても優しそうな人だった」とお互い一目会ったその時から結婚を意識していたとか。

約七か月の交際ということですが、デートはもっぱらお互いの家を行き来することがほとんど。「第一印象よりも話題が豊富で話していてとても楽しいんですよ」とは正昭さんの弁。

「お子さんは？」の質問には、お二人そろって三人とのお答。

「明るく楽しい家庭を」と話してくれたとてもホットな二人です。

ふるさと道具の生活史 ⑧

▽紙縒り（こより）△

辞書を見ると、細長く切った和紙を糸のように撚ったもの。とあります。

字も紙撚り、紙縒り、紙捻りの三通りがあてられ、ひらがなでかんぜより、こうひねりとも記されています。

標準的な長さ二〇㌢程度、太さ一・五㍉前後。和紙はもともと引っ張る力に強いが、それによりを掛けてあるので、力を入れて引っ張ってもなかなか切れないほど丈夫なこの道具、何に使ったかといえば、昔の役所ではもっぱら書類綴じに使われました。

表紙を付けて右又は左の端にふたつの穴をあけ、通して結べば簡単な整本の出来上り。右上（左上）の隅にひとつ穴をあけて結べば三～四枚の書類がうまくまとまります。

このこよりを追放したのがホチキスです。パチッとワンタッチで金属性の針が紙を綴じてしまう機能性には適いませんが、綴じる道具としてのこよりを自分で作って書類を保存するという「余裕」が欲しい……と思うのは、もはや無理なのでしょうか。

今は紙巻きたばこが全盛ですが、刻みたばこを煙管に詰めて吸った時代（昭和二十年代まで？）は、煙管の羅宇（管）の部分につまったヤニを取るためにこよりが使われました。

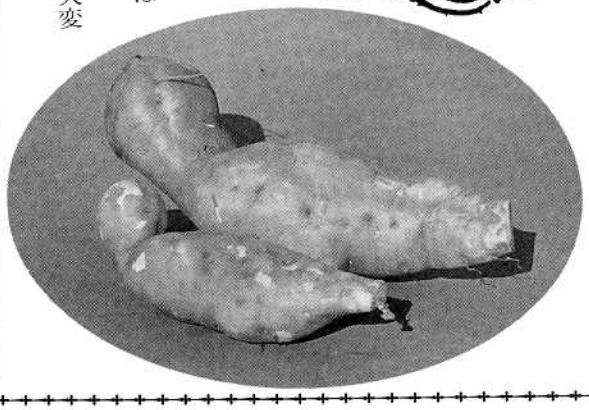
吸口の方から差し込んだこよりを雁首（たばこを詰めて火を着ける部分）へ突き出し、これを引っ張るとヤニが付着して取れて来ます。

囲炉裏があって。頑固親父が居て。裸電球のうす暗い灯りの下で、苦労してヤニを取った煙管で旨そうに一ぷく吸って。さて、寝るか……。

今井　満（みちる）ちゃん
（邦廣さん・三和子さん長女＝平）

ホットアングル

題して〝冬支度で大忙しのツチノコ親子？〟。
このツチノコそっくりのさつまいもを収穫したのは河村繁治さん（陰地）。
本物も今ごろは冬支度で大変なのかもしれません。



お便り

「ブラジル実習派遣」

岐阜農林高等学校三年
高井　秀樹（中通）

国際化時代の農業経営者育成を目的におこなわれているブラジル実習派遣。県下の農業高校生を対象とする実習派遣団に選ばれ行ってきました。派遣団は県内七高校からで私を含め男子9名、女子2名、引率2名の計十三名。七月十七から八月十七までの一ケ月間の派遣となりました。

ブラジルでは、25日間の日程で岐阜県人会の家庭でホームステイしながら農業実習を受けたり、牧場、農園を訪問してブラジルの農業を視察、体験したりする他、日本大使館や各領事館などいろいろな所に表敬訪問しました。また、イグアスの滝イタイプ発電所などを見学しましたが、とてもすばらしいものばかりでした。

日本とは違った経営方式を取っているブラジル農業は、とても広い土地で多くの労働者を使って大規模に行なっており、今でも目に焼き付いています。

今年からアメリカ研修もあり4日間の日程で、米作地帯などの視察をしたり、ディズニーランドなどの見学もでき、とてもよかったです。この研修を将来自分が自営するときに役立てたいと思います。

イグアスの滝で記念撮影
（右端が高井さん）

元気です！ 働くお年より

菊作り

「菊作りは、今の時期が一番楽しいですね」と丹精込めて作られた見事な菊の鉢を前に満足そうに笑顔を見せるのは、明治四十四年生まれ、今年八十一歳になる田口好巳さん（大明神）。

田口さんは、庭木の手入れや盆栽が好きで、その延長の趣味として三年ほど前から菊作りを始めました。

ひと口に菊作りといっても、見事な大輪を咲かせるためにはまず土づくりから入念に行わなければならないそうです。「いい菊を咲かすには、前の年の秋に田の土、川砂、油粕や堆肥をまぜた培養土づくりから始めます。ちょうど花が見どころの今の時期は、もう来年の準備にとりかかっているんですよ。春、苗を植えてからも消毒やいろいろ手間はくいますが、できた花を、親せきや近所へ配るととても喜んでもらえるから、それが楽しみで…」と菊作りをまるで子育てのように熱心に話して下さいました。

田口さんの夏場のお仕事は野菜づくり。白菜や大根さつまいもなどあらゆる野菜を作るそうですが、特に今年の夏は、スイカが大豊作だったとか。また今から雪が降るまでの間は、毎年枝打ちをして山の手入れをするそうです。

とにかく〝働くことが趣味〟と話す田口さんですが、元気で働くための健康の秘訣は、六十歳ころから人に聞いて始めた玄米食だとか。一日三食の玄米食とおかずも野菜を中心にした菜食メニューが田口さんの元気の素。これから冬にかけて菊の土づくりと枝打ちに忙しい毎日が続きます。

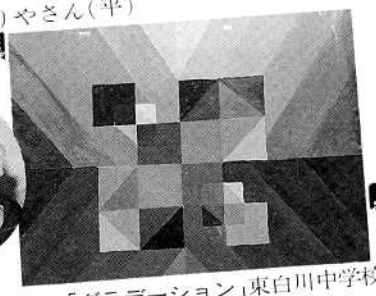
奥さんとみさんと一緒に

わたしの作品

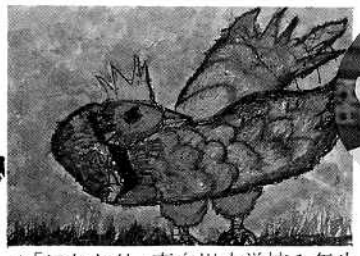
▲「グラデーション」
東白川中学校１年生
藤井まりやさん（平）

▲「ふしぎな森の中」を読んで
東白川小学校６年生
古田真由子さん（柏本）

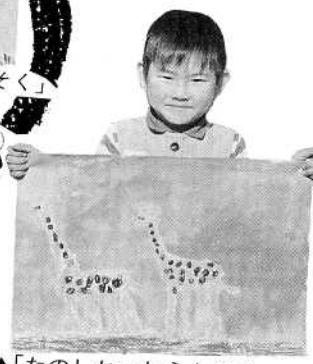
▲「たのしかったえんそく」
神土保育園
たぐちゆうこちゃん（平）



▲「グラデーション」東白川中学校１年生
村雲由近さん（中通）



▲「にわとり」東白川小学校１年生
杉山浩之さん（大沢）



▲「たのしかったえんそく」
神土保育園
やすえたかひろくん（下親田）

広報文芸

●俳句

無意識に眼鏡を置きて立ちし後ほど経て探すことの多かりき　浦和　桂川　熊吉
白川の清き流れに浸りつつひねもす揺れる川端柳　名古屋　村雲　さと
ろうのような頬をなでつつ名を呼ぶに涙溢れて声にはならず　安江　幸
婚礼の荷の来ると言ふ佳き日今日家の庭先に木犀香る　今井　かな
草土手に秋の日を浴び一群の曼珠沙華咲き花明りせり　安江　澄
日の暮のやや早まりて葉月逝く今宵鈴虫すずやかに鳴く　田口　一枝
秋深むこの朝の空晴れわたり細き花弁の菊は香れり　安江　龍玉
夕花は一晩井戸に漬けて置き明日は供えましょ彼岸の入りに　三戸　きり
年ごとに花の数減る野辺ゆけば久しく見ざる吾亦紅の咲く　安江　節子
昨日今日明日も木埃り身に浴びて刷毛造る身は按摩機が頼り　安江　守平
手入れせず草繁りたるさつま芋猪も見過し芋太りたり　安江すみよ
点々と色付きそめし山あいをバイクで走る母の命日　安江とくよ
病み臥して十日を経ちつつ母の顔日焼けの色も今は薄れて　今井　米子
敗戦時の呼び名でかけ寄り同胞の握る手と手よ面影ありて　安江　順子
手に汲みて飲みつ谷間の苔清水笹舟浮かし憩う一とき（前九月号訂正）　安江　順子
朝日さす水路のめぐりに咲く野菊まばゆきばかり白露光る　苅田　清美
一つ葉のしきりに散りて苔生ふる岩間の流れくれなゐに染む　早瀬　久子
●シャリシャリと足に返して籾を干すはじかき感触遠くなりたり　小池　弘子
夏の夜を踊り明かせし郡上の町も秋深まりて水澄み流る　伊藤　美枝
小春日の縁側に出てちょこなんと背中丸めて母は八十八　安江　正直
あちこちに墓石群れ立つサイパンに砕けし兄のみ墓佗しき　安江　香
大空に心あるごと哀しみの夕焼けもへて残月を抱く　小林　道子
ひと夏の日焼の腕を撫でながら香る湯にをり生きゐるはよし　安江　富枝
大君のためにと散った若人の最後の的となりし開聞岳　若井のぶゑ
大滝の鐘乳洞見物吾に最後の思出とならむ足なえにつつ　伊藤　重雄

あなたの作品をお寄せください―初心者、とくに若い人たちの投稿を歓迎します●偶数月の二十日までに神土伊藤重雄宛に出して下さい。

こぼれ「ひろい話」

「一番高い山へだれよりも先に登ったと言っても、それが記録されていなければ、いつかは知る人もなくなる。そうなったらそれは歴史でなくなってしまう。だから日記でもなんでもいい、記録しておくことが大切」。ある女性登山家はそう語る。▼彼女は、主要な山に女性で最初に登頂したのはだれかを調べ一冊の本にした。山の近くの旅館で宿帳を調べ、山小屋の雑記帳を丹念に調査したのだ。▼基盤整備によって郷土の姿が一変した。県道よりも立派な道路が縦横に走り農地も機械化が容易になった。素晴らしいことだ。▼ところで、それ以前の村の姿は細かく記録に残っただろうか。牛や馬で行った米作り。薪取りや草刈りの辛さ。そして、おふくろの味のかずかず…など。▼行政の歴史は正しく残るだろうが、庶民の生活の歴史はみんなが今を残す努力を今しないと消えてしまう。どんな些細なことでも書き留めておきたい。